

初期言語発達の様相

— 感覚運動期から表象期へ —

教育心理学研究室	肥	田	野	直
筑波大学文芸言語学研究室	星		三	和
国際基督教大学教養学部教育心理学研究室	栗	山	容	子
国立小児病院言語訓練室	蓮	見	元	子
教育心理学研究室	日	笠	摩	子

Aspects of Early Language Development with Relation to Cognitive Behavior

Tadashi HIDANO, Miwako HOSHI, Yohko KURIYAMA,
Motoko HASUMI and Mako HIKASA

This study investigated the language development, the cognitive behaviors (such as imitation, manipulation of objects and play) and the communicative behavior of four infants from 9 to 25 months. Children were observed longitudinally on three different situations; free play with an adult, manipulation play and two-word-sentence comprehension test. The analysis of behaviors revealed that: (a) Bubbling stage is characterized as the sensory-motor action and the passive communication. (b) By the time of the first one-word utterances, children manipulate familiar objects adequately according to their conventional use. They also communicate actively by pointing, imitation and other nonverbal behaviors. (c) Symbolic doll play precedes the emergence of the syntax. Symbolic play emerges about the time of first two-word sentences and increases with the development of the early syntax. At this stage several types of verbal communication are capable. Comprehension of two-word sentences is prior to their production.

はじめに

I 目的

II 実験方法

III 分析方法と結果

IV 考察

はじめに

最近では言語発達の初期の段階に対して研究者の関心が集っている。本大学院教育心理学専門課程の在籍者およびその出身者によって構成されたいくつかの研究グループもこの初期言語発達の研究に取り組んでいる。これらの研究は、単に狭義の言語行動の発達過程だけを取上げ

るのではなく、始語期前後の乳幼児の感覚運動的行動や対人行動などを幅広く観察・分析する方向を追求している。

肥田野を研究代表者とする「コミュニケーション能力の発達的研究」は昭和 52, 53, 54 年度文部省の科学研究費補助金 (一般研究 B) の交付を受けたが、これに関連する研究の一部は、既に本教育学部紀要 18 巻と 19 巻に「言語行動の発達」(I) および (II) として、大浜幾久子ほかおよび辰野俊子ほかによって報告されている。以下に報告する研究も、上述の研究の一環をなすものであり、星、栗山、蓮見、日笠の四名によって執筆された。(肥田野 直)

I. 目 的

言語は特殊な能力として他の行動から独立したものでなく、さまざまな認知的能力や対人的行動が統合されて発生し、これらと互いに影響しあって発達する。言語発達の基盤の一つは行為の発達、前言語期の感覚器や運動器を用いた実践活動を通しての外界の認知の中に求められる。

Piaget (1945)¹⁾は感覚運動的知能期に行為の面で構造化されたものが象徴期に入って表象の世界でくり返されるようになった時、象徴行動が出現し、その一つとして言語があると考えた。すなわち、言語は延滞模倣、象徴遊び等と同じメカニズムから発生すると言う。

しかし言語は、感覚運動的行為の発達の上に成立する象徴行動の一つではあるが、他の象徴行動以上に次のような重要性をもっている。

第一に言語は、その能記—所記関係が恣意的であり社会的に与えられるものである。そのため象徴性は高く独自であり、他の象徴行動とは区別される必要がある。

第二に能記—所記関係が社会的であることは、その獲得に対人関係が関与していることを示す。本来言語はコミュニケーションの手段として社会的機能を有するが、それだけでなく、能記—所記関係の社会的ルールを獲得するためにも対人関係の成立は不可能である。

第三に言語はそれ自体構造をもち比較的自立的な象徴の体系を形づくっており、単にものと名称の結びつきだけでなく、二語文・三語文と文構造を獲得していくに従い、空間的にも時間的にも広く複雑な事象を象徴できるようになる。従って、文構造という言語の特性に注目し、文構造の発達を支える認知行動を検討することは重要であろう。

このような特殊性をもった言語の発達過程をとらえ、その認知基盤を探るには、まず種々の認知行動及び対人行動と言語発達との関連について具体的な様相を明らかにすることが必要になる。そこで次のような認知的対人的諸行動をとり上げ言語発達との関連性を検討することを本研究の目的とする。

1. 模倣行動

模倣は外界を自己にとり入れ行動を調節することである。言語面においては構音機能を発達させ、また語彙や文構造の獲得にも重要な役割を果たすと考えられる。また、モデルが消えてからなされる延滞模倣は、モデルと後の行動が能記—所記関係をもつと考えられ、象徴機能の一つのあらわれと言われている。以上のことから模倣

と言語発達の関係を検討する。

2. 対象の操作活動

Inhelder (1974)²⁾、Lowe (1975)³⁾等によれば、対象物の操作の仕方の発達は、初期には対象のいかんにかかわらず感覚的な探索や運動を主体とした行動が多く、次に物の日常的習慣に添った使い方が出現し、それが定着した後、人形を用いたみだたて行動が出現するという過程をたどる。我々は操作の発達を言語発達との関係で次のように考える。第一に感覚運動的操作の段階では物が未分化な状態で把握されており、能記—所記が未分化で象徴機能も出現していないと考えられる。第二に日常習慣に添った物の使い方ができることは、物の一般性が獲得されており、現前の対象によって行為の延滞模倣が誘発されたものと言える。しかし、ここでは物は現前に存在し、行為のみが表象されている。一方言語の最初のあらわれである一語文発話も、McNeil (1970)⁴⁾のいう話題—論評構造のうち、状況や物が示す話題は現前し、論評のみが言語によって表象されたものである。この対応から、物の習慣に添った操作は一語文発話と関連すると思われる。第三に、象徴のみだたて行動が出現し、物—行為、自己—物—行為が象徴レベルで把握されるようになることは、言語面において構造をもつ文が発生し、物—行為、主体—状態等の分化が表現されるようになることと対応があると予想される。以上の仮説に基き、操作行動と言語発達の関係を検討する。

3. 遊 び

遊びの中で見られる諸行動を物への能動的なかわりという観点からとり上げる。感覚運動的な活動・物や関係の探索、イメージ・象徴活動などの外界の認識活動の変化を言語発達との関連から検討する。

4. 対人行動

言語の基本的機能の一つは伝達機能であり、それは人とのやりとりの中で獲得され、使われるものである。そして、伝達機能は、乳児期後半から、物のやりとりや指さしといった行動レベルでの発達をとげてきており、これが言語発達の前提となると考えられる。特に指さし行動は、言語の恣意性につながる、「さすもの」と「さされるもの」の間接化という象徴機能を担っており、言語発達との密接な関連が想定される。また、言語獲得において、人との共同行為が重要であり、自分と相手が主体となったり受け手となったりするやりとり行為の中で、主体—受け手—行為の構造が確かめられ、言語の構造的獲得の基盤になっていることが指摘されている(Bruner, 1977)。以上の観点から対人行動を分析し言語発達との関連を検討する。

II. 実験方法

A. 対象児および観察期間

対象児は都内保育園児4名(S:f, 観察期間9~25ヶ月, K:m, 同10~25ヶ月, M:f, 同15~24ヶ月, Y:m 同12~22ヶ月)。いずれも正常分娩, 身体発育正常。毎回満月齢前後7日以内に1~2日に分けて実験を行った。場所は保育園内の静かな一室で, 原則として朝の睡眠が終わり, 食事をとり, おむつを替えて機嫌の良い時に実施した。S. K. M は途中で保育園を退園したため, それぞれ, 20ヶ月, 18ヶ月, 19ヶ月から, 母親に保育園につれてきてもらい, 同じ場所で実施した。

B. 実験課題場面および実施方法

1. 自由遊び課題場面

一定の遊具の置かれた室内での自由遊び。実験者(1名)は遊びの相手をする。模倣行動の観察のため, 実験者は遊具を用いた積極的な働きかけやことばかけを行う。実施時間は30分間(15分×2回), 今回の報告ではこのうち15分間についてのみ扱う。使用遊具は次の通り: 玩具の電話器2台(ボタンを押すとベルが鳴る。ネジまき式), クレヨン(箱入り), 画用紙, トムボーイ(らせん状のはがね), 絵本4冊, 小ボール, トラック(50×22cmの大きさ, ひも付), クマの玩具(木製, 頭部と尾部にひもがついており, 尾部のひもをひくと手足が上下を動く), 積木8個, 犬のぬいぐるみ, タラちゃん人形。

観察者(1~2名)は5秒間観察, 続く10秒間で行動記録を行う。従って5秒1単位が1分間に4単位, 15分間で60単位が記録される。また同時にVTRで場面を録画し, 後日, 現場記録をVTRで補って, 細かい行動記録を作成する。模倣, 発声行動に関しては, VTRをもとに, 全実施時間について記録する。

2. 操作課題場面

日常生活において使用される道具, 用途の広い道具および遊具等を用いた遊びにおける, 対象物の扱い方を観察する。子どもの前に規定の道具, 遊具をならべ, 実験者は子どもがどの道具も時間内に使用するよう配慮して提示をするが, 積極的働きかけを行わず, 子どもが働きかけた時のみ最少限の応答をする。これは, 誘導された行動・模倣・応答行動が起るのを抑え被験児の行動が常に自発的であるようにするためである。実施時間は15分間。使用道具として次の4種の遊具を設定する。

①日常的に使われる道具。食事グループ: 深皿, スプ

ーン, 哺乳ビン。身づくろいグループ: 鏡, ブラシ, 鬍子(ミニチュア)。風呂グループ: おけ, スポンジ, ②用途が広いと思われる道具, 様々な使い方で操作できる物: 箱, 紙(白上質紙・少しくしゃくしゃに丸めてある), 布(タオル地)。③人形。象徴的使用がなされるかどうかを見る: 着衣でくつ下をはいたキュービー, 犬のぬいぐるみ。④その他の遊具: トラック, 積木, ガラガラ。

観察者は, 規定の遊具, 道具を子どもがどのように用いて遊ぶかの行動観察記録を全実施時間について行い, それをVTR録画によって補足して詳細な操作行動および発声の記録を行う。

3. 二文節文理解実験

構文の理解の程度を調べるために, 原則として二文節文でさまざまな格関係をもつ文を用意した。格関係については, 吉田(1976)の初期二文節発話の資料から2才2ヶ月までに出現した構文のうち, 早く出現したもの8文, 遅く出現したもの6文を選んだ。

課題文は表4の通りである。課題文に含まれる物及び課題とは無関係な物を被験児の前に並べ, 実験者が課題文を言う。この際身振りを入れず言語のみによって教示する。例えば, 「キリンをちょうだい」では, 被験者の前に2頭のキリンと2頭のゾウの玩具を交互に並べて置き, 手を出さずに教示する。課題文は一試行内で2~3回繰り返され, 同じ課題文が最低2試行続けられる。被験児の行動を観察し, 課題文全体あるいはその一部の語彙を理解したかどうかを判定する。

III. 分析方法と結果

A. 自発的発声行動

1. 分析方法

自由遊び課題場面の発声記録(15分間)をもとに, 発声行動のうち, 直接模倣と聞きとり不能な発声行動を除く自発的発声について, 構文, 語彙, 対人的かかわりにおける発声の面から次のように分析する。

a. 構文面: 構文を次のように分類する。

- ①無意味発声及び喃語
- ②一語文(自立語1からなる)
- ③擬似語連鎖(無意味感嘆語「ア」+自立語1。例: アッ ママ)
- ④一文節文(自立語1+付属語, 例: コッチモ)
- ⑤擬似二文節文(無意味感嘆語「ア」+一文節文または二文節文の間に時間的間隔のややあるもの, 例: パパ, しばらくして, イクヨ)

表1 発声行動の

月齢	S																			言語の特徴
	構文 *1					語い *2								对人的発話						
	無い	一語文	一文節	一文節	三文節計	名詞	述動	述修	動作	感嘆	助詞	助動	計	応答	拒否	要求	質問	計		
9	2																			
10																				
11	1																			
12	2				2															喃語のみ, 発声数少ない
13	27				27															
14	43	6			49	3								3						一語文出現, 無いみ語優位
15	18	4			22	1								1						
16	32	3	1		36	1					1		2							一文節文出現, 付属語が出現するものの続かない
17	29	3	1		33	1					1		1							目立った変化なし
18	53	7	1	1	62			1					2							
19		2		1	3			1					1							
20	16	6			22	2							2							
21	28	28			56	7	1						8	2				2		一語文の頻数, 種類が増加, 述語表現応答的やりとり出現
22		8			8	6	1						7							
23	23	65		1 1	90	26	1 1				1	130	5					5		一文節文出現, 語いの種類が急増・付属語出現, 有意味語優位
24	18	23	3	1	55	10	4 2	3	1	1	1	122	9					110		
25	5	33	1	5	44	17	2	1	2	1	3	26	22					22		応答的発話の増加
		18	1	5	24	12	2	1	1	1	3	20								

*1 (上段 種類, 下段 種類) *2 (上段 種類, 下段 初出種類)

⑥ 二文節文 (自立語 2 または 自立語 2+付属語, 例: ココナイノ)

⑦ 三文節文 (自立語 3 または 自立語 3+付属語, 例: オニイチャンカイシャイツチャッタノ)

各々の構文について各月の出現頻数及び種類 (但し無意味発声及び喃語は頻数のみ) を調べる。

b. 語彙面: 有意味発声を成分ごとに切り, 次のように分類する。

① 対象語 (物や人の名前, 代名詞を含む。例: ワンワン, ココ)

② 動詞的な述語 (動作を表現する語, 必ずしも文法的

な範疇での動詞とは一致しない。例: ネンネ, アッタ)

③ 修飾語的な述語 (状況や感情を表わす語。例: オモタイ, アカイ)

④ 動作語 (動作を伴って発声する語。例: ヨイシヨ, パンザイ)

⑤ 感嘆語 (例: ハイ, ゴッチャン)

⑥ 助詞 (例: ヨ, モ)

⑦ 助動詞

この分類は大人の語彙の範疇とは必ずしも一致しない。たとえば, 無い状態をナイナイと表現すれば, 状況

発 達 的 変 化

K														言語の特徴						
構 文					語 い					対人的発語										
無 い み	一 語 文	一 文 節	二 文 節	三 文 節	擬 三 文	計	名 詞	述 動	動 詞	感 嘆	助 動	助 詞	計		応 答	拒 否	要 求	質 問	計	
10						10														無意味, 喃語のみ
10						10														二語文出現
15	6					21	2							2						
	1						1	2						2						
3	0					3	1							1						
	1						1	0						0						
16	5					21	2							2	2				2	
	4						4	2						2						
11	3					14	1							1						
	1						1	0						0						
1	0					1	0							0						
	0						0	0						0						
4	5					9	3							3						
	3						3	0						0						
5	11					16	5	1						6	6				6	模倣にかわる応答的やりとりが多い
	6						6	1	1					2						
9	3					12	1							1						
	1						1	0						0						
51	39					90	4			1				5	31				31	喃語} 急増, 拒否が多い 一語文}
	6						6	3		2				5						
12	22		5			39	12		3	1				16	4				5	有意味語が優位, 文節文に近いもの出現 語いの種類増加の傾向, 述語表現出現
	14						14	10		3	1			14						
6	51	1	0	1		59	23		1	1		5		25	14				115	一文節文二文節文の出現, 後続して増加, 助詞初出, こと ばのやりとり急増
	26	1		1			22	15		1	1		2	17						
0	26	6	1	2		35	17	2	1	1		1		21	7				7	
	16	5	1	2			24	11	1	1	1		1	14						
1	24	1	0	10		36	23	1	1			1		26	18				725	二文節文の増加
	22	1	0	3			26	14	0	0		0		14						
6	35	4	0	24	5	276	21	4	5		2	5	4	46	15	1			319	文節文急増, 三文節文出現, 助動詞出現, 付属語が増加して ことばにさまざまなニュアンスが加わる
	17	2	0	22	5	248	14	3	3		2	3	4	34						

をあらわす修飾語であるが、物をしまいながらナイナイ
といえ「無くする」という意味の動詞的な表現である。
従って、発声の文脈によって同一の発声も、別の範疇に分類されることもある。

各々のカテゴリーについて、各月の出現種類と、そのうちその月に初めて出現した発声の種類を検討する。

c. 対人的なかかわりの発語：有意味発声のうち、人にむけられた発声の種類を次のように分類する。

- ① 応答的発語：実験者の質問や働きかけに対して発言によって答えているもの。
- ② 拒否：イヤ等、拒否の発言で応えているもの。

③ 質問：発言によって質問。構文として質問形をなし
ていなくても抑揚で質問を表わしているもの、確認のた
めの質問も含める。

④ 要求：人に何かを要求している発言。状況から要求
発言と判断されるものを含む。

⑤ その他：人に提唱している発言（例：コレデアソボ
ウ）、呼びかけ（ハイ、ママ）、人に対し自己を主張する
発言を含む。

2. 分析結果

S, K, M, Y の構文種類別出現頻数, そのなかの初出構
文の頻数, 語彙の種類数, うち初出の種類数, 及び対人

表 1 (つづき)

月 齢	M																				構 文	言 語 の い	
	構 文					語 い					対人的発語					言 語 の							
	無 い み	一 語 文	擬 一 文 節	擬 二 文 節	三 文 節 計	名 詞	述 動	述 修	動 作	感 嘆	助 詞	助 動	計	応 答	拒 否	要 求	質 問	計	構 文	言 語 の い			
10																							
11																							
12																							
13																							
14																							
15	25					25							0					0			なし	喃語のみ	
16						0							0										
17	49	17				66	3	2	1				7	1	1	0	2	4			命名の一語文	頻度に比し種類少	
		6				6	3	2	1				7										
18	67	21				88	4	1					5									人間、動物全てにワンワンの命名	
		5				5	1	0					1										
19	43	24				67	6	3	2	1	3		15	3	1	3	0	7				語いの種類増加	
		13				13	3	2	1	1	1		8										
20	23	44	3		1	71	12	5	3	3	2		25	4	4	7	0	15			二文節文出現, 有意味語が優位	語いの種類増加, 命名でない名詞	
		25	0		1	26	7	3	2	2	1		15										
21	19	61	1	2	3	2	88	24	3	5	1	2	3	1	39	29	1	7	3	40	一文節文, 擬似二文節文出現	付属語の出現対象語の増加	
		29	0	2	3	2	36	13	1	1	1	0	3	1	20								
22	16	52	2	8	4	13	96	20	13	3	2	2	3	3	46	9	3	15	3	30	一, 二文節文増加, 三文節文出現	述語の種類増加	
		26	2	8	3	9	48	10	10	2	1	0	1	2	26								
23	34	50	2	25	3	10	112	25	24	9	9	4	1	6	45	13	2	13	8	36	一文節文増加, 二文節文に助詞の入った形出現	付属語の種類と頻度増加	
		28	2	12	3	9	54	11	4	4	0	0	3	2	24								
24	21	39	13	25	2	23	112	32	27	15	10	1	1	6	8	6	9	1	5	12	27	二文節文が主流で組合せも多様化	述語表現豊かになる, 助動詞増加
		22	2	15	2	22	63	9	10	1				4	24								
25																							

物やりとりの頻数, 言語発達の特徴を表 1 に示す。
 この結果を散見すると, 4 児の言語発達の様相はかなり違っているように見受けられるが, 仔細に検討すると一定の発達の方向性が窮える。
 4 児とも観察開始の時点 (S: 9 ヶ月一以下, ケ月は省略一, K: 10, M: 15, Y: 12) では, 喃語のみで, 有意味発語は皆無である。頻数は M に多いものの, 他の 3 児は頻数も少い。喃語の数は次第に多くなり, 発声活動が活発になってくると, 最初の一語文が出現する。このあと一語文はごくゆるやかな増加をするが, 発話の頻数, 語彙とも少い時期が続く。M は語彙の種類は少く, 頻数が多い。これは少数の語を広い対象に向けて広範に使用する傾向があったためである。特にこの時期の一語文は, 絵本の絵, 犬のぬいぐるみやトラックを指さして発せられることが多く, 命名の機能を果していると考えられる。
 この時期は, 無意味発声の方が有意味発声よりも頻数

が高く, 無意味発声の優位な時期で, S, K は 20 ヶ月, M は 19 ヶ月まで続く。Y の言語発達は, 観察終了時 (22) まで, この段階にとどまっている。
 S, K の 21 ヶ月, M の 20 ヶ月は一つの転換期といえる。この時期に, 一語文による有意味発声活動が優位になり, 種類も増加する。また文節をもった文が出現する。(S: 23, K: 21, M: 20) たとえば, 擬似二文節文「ハナ, キレイ」(K. 21, 2 語続いて発話されているものの, やや間がある), 一文節文「カズクント」(K. 22) 「コッチモ」(M. 21), 二文節文「カアサンイナイ」(S. 23) 「カズクンノオメメ」(K. 22) 「ジージーナイナイ」(M. 20) などが初出している。
 語彙の面では, 対象語の種類が増加し, 述語表現が出現 (K), ゆるやかな増加 (K, M) がみられる。また, 助詞「モ」(強意) (S. 24, M. 21), 「ノ」(所有) (K. 22, M. 21), 「ト」(共同) (K. 22), 「ハ」(提唱) (K. 22), 助動詞「ナイ」(否定) (S. 23, M. 21) などの付

特 徴	Y											言語の特徴	
	講 文			語 い				対人的発語					
	無 い み	一 語 文	計	名 詞	述 動	感 嘆	計	応 答	拒 否	要 求	質 問		計
対人的発話													
	2		2										
有意味語による応答不可	14		14										喃語のみ, 発声数少ない
	4		4										
要求拒否応答のことは出現	13		13										
	10		10										
	16		16										
	6	6	14	3		1	4	1		2		3	一語文出現
Eの発言によく注目して応答しようとする	4	4	4	3		1	4						
誰, 何の質問に正確に回答	31	3	35	2			2						発声数増加, jargon 多い, 一語文やや増加
	42	2	2	1			1						
状況に頼らず E の言語のみの問いに正確に回答	44	4	46	2	1	1	4						
質問の増加, 予想しながらの質問	4	4	4		1	2	3						
状況にとらわれず言語のみで発展的に回答, 会話らしいやりとり	46	6	52	1			1						
	1	1	1	1			1						

属語が出現する。

対人的なやりとりの面では、有意味語による応答が可能となり、「コレハ？」(K. 22)「コレナーニ？」(S. 25)の質問文が出現する特に M は 実験者の発言によく注目し、誰、何の質問に的確に答えることができる。しかし、まだ物理的状況の具体的な手がかりを離れた言語によるやりとりは困難である。

この時期は、K は 23 ヶ月、M は 21 ヶ月までで、この後、次の局面を迎えるが、S の言語発達は、観察終了時 (25) までこの段階にとどまっている。

K の 24~25 ヶ月、M の 22~24 ヶ月は、文節をもった発話が、頻数、種類とも増加する時期である。2 児とも二文節文が急増する。「アカノスイカ」(K. 25) (連体格+体言)「カワタベル」(K. 25) (対象格+述語)、「マダハイッテル」(M. 24) (連用格+述語)「チョウチョハシッテルヨ」(M. 24) (主格+述部) など、格関係も多様になってくる。また、最初の三文節文が出現する。

「モウコレダメヨ」(M. 22)、「ココマドアルノ」「オジチャンココノル」(K. 25) など。

語彙面では、種類、頻数が増加し、言語表現は豊かになってくる。

対人的なやりとりも積極的となり、物理的状況の助けに頼らず、言語だけで実験者とやりとりすることができるようになる。やりとり自体も長く、会話らしくなってくる。たとえば、(クレヨンの箱を振ってみて) M. 「マダハイッテル？」実験者「はいってるかなあ」M 「ナイ」実験者「ないね」M (別の箱を振って)「ハイッテル」実験者「はいってる？」M 「キイロキイロ」実験者「きいろあるかな」M 「アックロ」など。

以上、4 児の言語発達の様相を一定の流れの中でみてきた。言語以外の諸行動との関連を考察する上での手がかりを提供する意味で言語発達の時期を次のようにまとめておく。

第 I 期: 喃語期 (S: 9-13, K: 10-11, M: 15, Y:

表 2 二文節文理解課題の成功月齢と自由発話（自由あそび課題）の出現月齢

格 関 係	課 題 文	月 齢									
		17	18	19	20	21	22	23	24	25	
対格+述動	キリンをちょうだい	K	M			S				Ⓜ	Ⓚ
連用+述動	もう1つちょうだい		K	M			Ⓜ				(S) Ⓚ
位格+述動	箱に入れて下さい			M			Ⓜ				Ⓢ Ⓚ
具格+述動	おはしでたたいて下さい			M				Ⓜ			Ⓚ
主格+述動	ゾウがいますね				K	M	Ⓜ				(S) Ⓚ
連体+体言	人形の目はどれ				K	M	Ⓜ		Ⓚ		(S)
位格+述動	人形にあげて下さい				K		M				(S)
連体+体言	大きいボールはどれ						M				(S)
連用+述形	～ちゃんと同じね		K				M			S	
主格+述動	ゾウがねているわね				K			M		Ⓜ	Ⓚ
主格+位格	ウサギは袋の中よ				K			M			(S)
共格+述動	Eとかえりましょう					K		M		Ⓚ	
位格+述動	犬をくぐって下さい									M	K
位格+述動	クマのところでねましょう									K	(M) (S)

K・M・S—各児の理解課題の成功月齢

(S) (M)—基準 (2ヶ月連続成功) 未達成の成功

Ⓚ・Ⓜ・Ⓢ—各児の自由発話の中で対応する格関係を含む発話の出現した月齢

12-18)

第Ⅱ期: 一語文出現期 (S: 14-20, K: 12-19, M: 17-19, Y: 19-22)

第Ⅲ期: 一語文定着・文節文出現期 (S: 21-25, K: 21-23, M: 20-21)

第Ⅳ期: 文節文増加文 (K: 24-25, M: 22-24)

(ただし、M は観察開始時が15ヶ月と遅く、観察時には有意味語がなかった。2回目の観察は17ヶ月で、この時には一語文が出現していた。このような状況のもとで、M の15ヶ月時を喃語期としたが一語文出現期でないと決定するものではない。)

次に個人差について述べる。

Y の言語発達には、他の3児と比べて、大きな相違があった。有意味語発声の初出が19ヶ月と遅く、しかも、それまでの喃語の段階でも発声数自体が少い。20ヶ月で無意味発声数が急激に増加し、いわゆる jargon と呼ばれる音節が長く抑揚があって大人の発話の調子に似ているが、音韻の非常に不明瞭なものがみられた。

S は一語文の初出時期が遅くなかったにもかかわら

ず、その後の発達は非常にゆるやかであって、「モシモシオカジャンデスカ」「カイシャイッタッタ」(25) など、比較的長い音節を含む二文節文が現われているが、三文節文の出現までは至らなかった。

B. 二文節文理解及び自発的発話との比較

1. 分析方法

二文節文の格関係理解 (全問14課題) が、いつ頃、どのような順序で可能になるかを調べるために、実施した各課題について、連続2ヶ月成功した場合を、理解が成立したと判断した。そのうちの最初に成功した月齢を理解成立の月齢とした。また自発的発話との関連をみるために、自由発話の中から、課題の格関係と同じものを取り出し、その初出の月齢を示した。

2. 分析結果

結果を表2に示す、S, K, M の表示は、それぞれ理解課題に成功した月齢を示す。()内は観察終了月に成功したために、連続2ヶ月の基準の満たされないものを示す。Ⓢ, Ⓚ, Ⓜは各格関係を含む発話の初出した月齢

を示す。

K と M には二文節文理解成功の時期に、多少ズレがあるものの、課題成功の順序が似ている。17ヶ月以前に成功した課題は全くみられない。18-21ヶ月までに、位格(「ヲ」と「デ」)+述語動詞の2課題を除いて成功に達する。2児に共通して比較的理解が容易であったのは、対象格「ヲ」+述語動詞、連用格+述語動詞、位格「ニ」+述語動詞、連体格+体言の各課題である。24ヶ月になると、K、Mとも残りの課題に成功し、全問完成する。Sはこの時、連用語+述語動詞(～ちゃんと同じね)に成功し、25ヶ月に入って急速に理解が進むが^{8/14}課題の成功にとどまっている。Yは最後まで成功せず、課題の一部の動詞(ちょうだい、たたいて)が理解されたのみであった。

二文節文理解と発話の関連から次のことがいえるだろう。喃語期には、二文節文の理解に成功していない。一語文出現期には個人差が大きい、一語文定着期の終りにはほとんどの課題に成功している。二文節文の増加期には完成し、二文節文発話の増加に、二文節文理解が時期的に先行していることがわかる。このことは、具体的に個々の格関係でも、(表2)明らかである。

C. 模倣行動

1. 分析方法

自由遊び課題場面15分間における全模倣行動を、形態、モデルとの時間的距離の点から次のように分類し、頻度を調べる。なお、模倣が不完全なものも含めた。

①形態

動作模倣(モデルの動作の模倣)

動作と発声の模倣(モデルの動作と発声の両方を模倣)

無意味発声模倣

有意味発声模倣(構文別に分ける)

②モデルとの時間的距離

直接模倣(モデルの行動の後、子どもの行動が5行動以内に模倣が出現)

延滞模倣(モデルの行動の後、子どもの行動が5行動以上離れて模倣が出現。あるいは前回以前の実験場面でのモデルの行動の模倣。動作中心の模倣についてのみ)なお延滞模倣は広い意味では物の慣用的な使い方、言語、象徴行動も含むが、ここでは狭い範囲に限定する。またモデルが確認できて、明確にわかる場合に限った。そのため、実験場面で起ったことがらを模倣した場合のみを採用した。

2. 分析結果

①動作模倣

動作模倣は4児とも観察の開始時から行われているが、頻数がみる限り、直接模倣、延滞模倣とも、増減のくり返して、発達的な一定の傾向はみられない。内容の分析によると次のような傾向が窮える。直接模倣から見てみる。

比較的初期の模倣行動は、振る、たたく、つかむ、といった既得の感覚運動的な行動の模倣が多い。11~12ヶ月頃から、クレヨンで描く(K. 12)、トムボーイにクレヨン、積木を入れる(S. 11, K. 12, Y. 14)、電話のネジ、ダイヤルを回す(Y. 16, S. 15, K. 13)といった子どもにとって新しい行動の模倣ができるようになる。このようなタイプの模倣は頻数に個人差があるものの、言語発達の喃語期後半から一語文定着期まで見られる。動作模倣は、外界を自己にとり入れ、自己を調節する手段として、発達の早い時期から出現していることがわかる。このような対事物の子どもにとって新しい行動の模倣に加え、イナイイナイバア(K. 18, M. 15)絵本の絵を指さす(S. 14, K. 24)といった人との共同行為を含む行動の模倣が現われる。これは、ちょうど一語文出現の頃と期を一にする。さらにこの傾向は、人がみだたた行為の模倣にまで発展してくる。たとえば、人形にベルを押させる(S. 18)人形をおじぎさせる(S. 21)人形を寝かせる(S. 21)リンゴ(絵本の中の)を犬にやる(K. 23)など。このような模倣は、一語文定着の頃から見られる。

延滞模倣については、4児に見られるが、月齢を追うに従って増減をくり返し、また頻度も少いため、一定の発達の傾向は見られない。実験場面に限定し、モデルが確認できる場合のみをとりあげたため、場面規定性が大きく、従って頻度も少いと考えられる。模倣の内容を見ると、トムボーイの中に人形、積木を入れる(K. 16, S. 17, M. 19, Y. 22)クマのヒモをひっぱる(Y. 16)犬をトラックに乗せる(M. 24)などがみられる。これらの行動は遊具に誘発されて出現し、遊具の新しい扱い方を学習するようなタイプの行動であり、扱いだけが象徴されている。従って物の用途的な使用(物の操作のところ後述)と同じレベルの象徴性をもつ行為といえよう。モデル行動を再現する具体的な刺激のないところで行われる延滞模倣は、物の象徴的な使い方と対応するタイプの模倣と考えられるが、ここでは観察されなかった。

②発声を中心とした模倣(図1参照)

初期(S. 13まで、K. 20まで、M. 15, Y. 18まで)は発声模倣はほとんど見られない。Sの14-20ヶ月、Mの17~20ヶ月、Yの19-20ヶ月、(Kはなし、後述)の特徴としては、種類が少く、自発的に発声された語

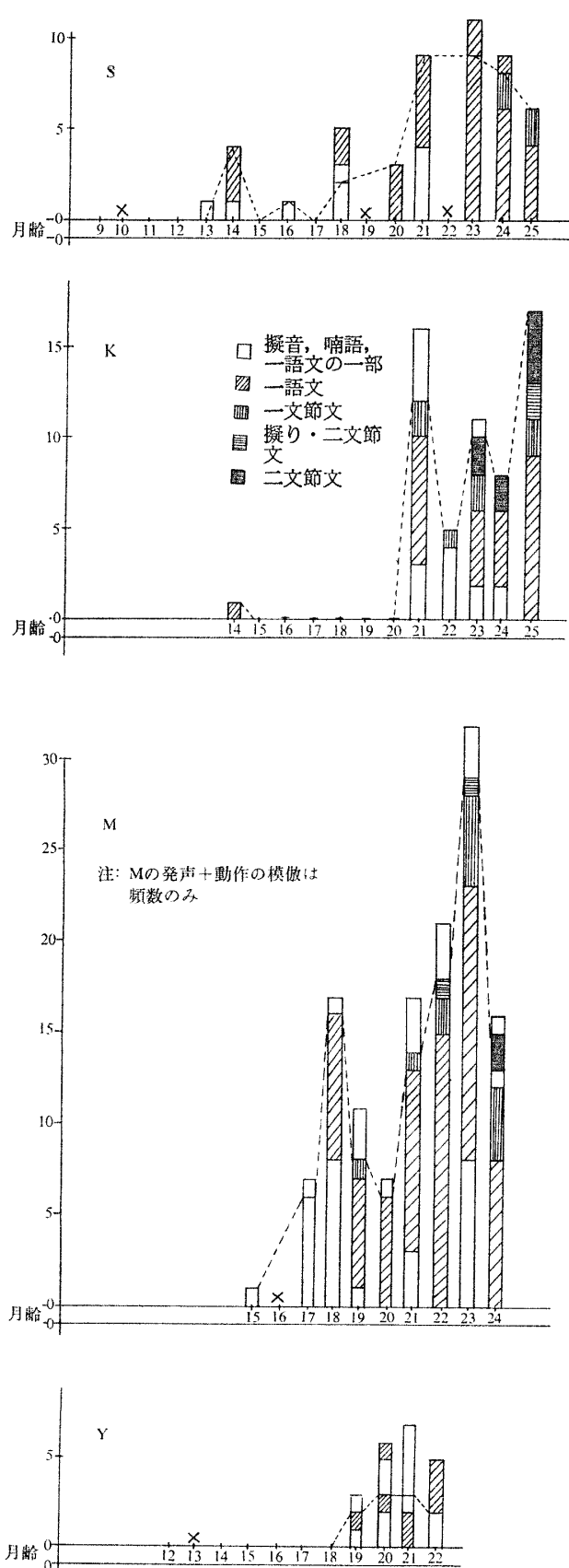


図 1-1~4 発声を中心とした模倣の構文別頻数
 点線の上段: 発声+動作の模倣
 " の下段: 発声のみの模倣

を模倣している。たとえば、「ワンワン」(S. 14, 16 M. 18), 「チョコチョコ」(S. 14) 「ブーブ」(M. 18) など。既にみたように、M の「ワンワン」は自発的発声でも非常に多く、指さしも付随して頻繁に行われている。「ワンワン」という音声と対象の結びつきを知り、獲得したばかりの語を反復して確認するための模倣と考えられる。S, Y についても、自発的発声行動を合わせて考えると、同様に、自己確認のための模倣と考えられるだろう。K は、14ヶ月に「ガアガア」という有意味発声模倣が出現しているものの、そのあと20ヶ月までは現われていない。ところが、自発的発声行動の分析によると、18ヶ月に既得の少数語による応答的なやりとりがみられている。この応答的なやりとりのなかで、対象と音声の結びつきを知り確認することをやっていたのではないかと考えられる。そのため、自己確認の機能をもつ模倣がみられなかったのではないかと。

Y の発声模倣は19ヶ月で初出した後、わずかではあるが増加の傾向がみられる。この19ヶ月は一語文の初出する時期であり、一つの転換期といえよう。ただし、全体に頻度も少なく、発声模倣の性質ははっきりしなかった。

これまでの傾向は、一語文出現期と時期的に一致している。

S, K, M の21ヶ月以降は発声模倣の種類と頻数が増加している。一語文だけでなく、分節をもった文も模倣できるようになる。この時期の模倣の特徴は、モデルを機械的、かつ自動的に反復するという傾向をもつ。なかには、モデルの「お花ね」を「ナネー」(M. 22) 「これも車ね」「えー」(K. 23) と一部だけを反復する場合もみられた。

K, M の23ヶ月以降、頻数に大きな変化はみられないが、構文面でも、疑似二文節文、二文節文の模倣が出現している。いずれの場合にも、自発的発声の中では、それより早く出現しているところから、自発的発声の中で現われる最も複雑な構文を、模倣が凌ぐことはないといえるだろう。すなわち、模倣によってとり入れることができる構文は発話の中で十分使いこなせるものであるといえよう。以上の特徴は文節文増加期と時期的にはほぼ一致している。

D. 操作行動

1. 分析方法

操作課題場面において提示された道具、遊具を各被験児がどのように用いたかについての行動記録から操作行動を以下のように分類し、その発達過程を検討する。

a. 非用途・解釈不能な行動

対象物の本来の機能あるいは用法に基づいた行動ではなく、おとなの観点からは意味のない感覚運動的な行動。既得の行動シエマが対象物に限定されることなく適用されていると考えられる。

b. 機能的・用途的行動

対象物の機能や性質に基づいた、あるいは慣用的な用い方をする行動。日常生活の中で物には一定の用いられ方があるのを理解していること、また人の観察や模倣を通じて慣用的な使用があるのを理解していることを示す。

c. 人形有意味行動

人形を用いた行動のうち人の象徴として扱っていると判断される行動。人形はそれ自体の物理的性質に基づいた用途の使用法は無く、人形の象徴として使われて始めて遊具としての意味をもってくる。また人間のミニチュアであって能記と所記に知覚的類似性があるという人形の特性から象徴的行動が誘発されやすいと考えられる。さらに人間の象徴として使われることによって非常に多様な象徴的行動を発展させることが可能である。

d. 象徴的行動

対象物をそれとは異なる物として見たてる、あるいは現存しない事物や事象を表象的に見たてる行動。

2. 分析結果

操作行動のうち非用途・解釈不能な行動については出現頻数を図2に示す。さらに有意義な操作行動についてはおもな行動の出現頻数を表3に示す。

a. 非用途・解釈不能な行動

頻数については個人ごとにあるいは月齢ごとにばらつ

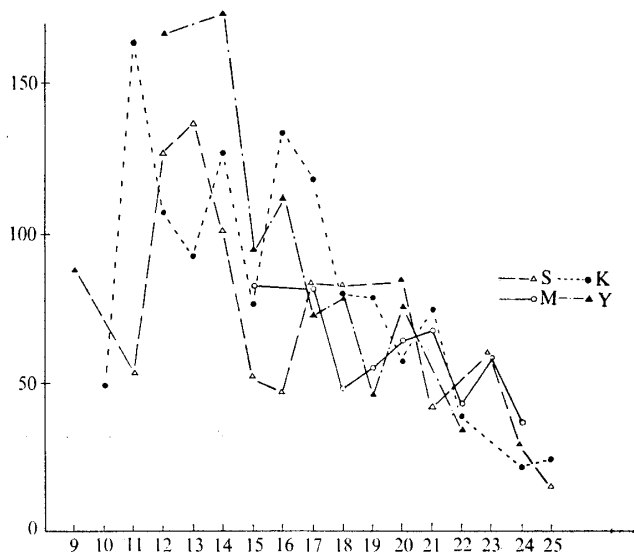


図2 月齢別出現行動数 (非用途・解釈不能)

きがあるものの、おおまかには以下の傾向がある。ごく初期(9~11ヶ月)には行動数がやや少ないが13~14ヶ月に増加し、15ヶ月順大きく減少する。15ヶ月以降は増減をくり返しながらも全体としては減少している。行動内容を検討すると初期にはたたく、なめる、ふりまわす、いじりまわす、ひっくり返す等が多くみられた。これらは循環反動的であり、既得のシエマを対象にかかわりなく適用している。16~18ヶ月頃から箱や帽子の中に手を入れる。人形の細部を指先でさわる、動かしながらなめる等、物の細部への注目や能動的な操作によって物の性質を知ろうとする行動が観察された。

b. 機能的・用途的行動

4児とも観察開始時から出現している。頻度をみると初期(9~13ヶ月)には全体に行動数が少ないが、以後増減をくり返し発達の傾向は明らかでない。しかしながら行動内容を検討すると用いられる遊具とその操作、時期について4児共通に次のような発達の変化がうかがえる。12ヶ月頃までにはオケ・箱に物を入れる・出す、哺乳ビンを吸う、皿にスプーンを入れる、ガラガラをふる等の行動が出現している。これらは既得の感覚運動的行動を対象物の性質や慣用的な用途に合わせて適用していると考えられる。

おおよそ15~18ヶ月頃にはトラックの荷台に物をのせる、ブラシで髪をくしけずる、スプーンですくう、帽子をかぶる等が出現する。物の性質や慣用的な使い方に従って既得でない新しい行動を適用して扱うもので、本格的な機能的用途的行動と判断される。18ヶ月頃からタオルで顔をふく、積木をつむ等がみられる。タオル、スポンジ、紙、積木は用途が広く物と特定の操作行動とが結びつきにくい、このような物を用いた行動は出現時期が比較的遅く頻度も少なかった。

c. 人形有意味行動

人形有意味行動はMは観察開始時からありSは12ヶ月、Kは13ヶ月、Yは18ヶ月に初出する。出現頻数は18ヶ月までは少なく19~20ヶ月及び23~24ヶ月頃増加する。内容を見ると、人形を抱く、動かす、顔を人形につける、衣服を脱がす等は人形有意味行動のなかでも初期にみられる。これらは道具を用いずあるいは人形に密着した物のみを用いており、人と行為が萌芽的に象徴されてはいるが、遊具としての用途的使用の色彩の強い行動である。少し遅れて人形の口にスプーンや皿をもっていく(S 16, K 14, M 19, Y 19)、帽子をかぶせる(K 12, M 19, Y 17)、人形の頭をブラシでこする(S 12, K 20, M 19, Y 20)等、人と行為の両方が象徴されており、さらにそこに物を用途的に介在させて

表 3 主な有意味操作行動の内容

分類	氏名 月 齢 内 容	S														
		9	11	12	13	14	15	16	17	18	20	21	23	24	25	
用途・機能	おけ, 箱に何か入れる (出す)	3		13	11	14	5	33	11	6	7	3	13	3	6	
	鏡を見る		4	1	7	7	7	8	8	8	3	2	4	5		
	皿にスプーンをいれる, 皿の中でスプーンをたたく		8			2	4	5	1	13	8	4				
	哺乳びんを吸う (吸うふり)			6		9	4	1		3	4		6	2		
	がらがらをふる	2		5		5					10			1		
	哺乳びんのフタをあける (しめる)			16	7	17	9	15				2	1	6	6	16
	トラックを動かす							4				9	3		2	1
	トラックに何かのせる							2	2	4		2			2	1
	帽子をかぶる							2	2	2	3	1		1		
	ブラシで髪をとかす							3	3		3					
	スプーンですくう							1	1	3	1	2	5	4	1	
タオルで顔などふく			(1)										3		1	
全 総 数		5	22	39	34	77	41	106	42	41	69	25	75	58	63	
人形有意味	人形を抱く, ほおずりする			2		5	10	10	1	2	2	3			4	2
	人形に靴下, 帽子, 洋服の着脱					11	3	7	12	7	1	16	7		10	6
	人形にスプーン, 哺乳びんをさしだす								1		2	1	6	6	1	1
	人形の髪をブラシでとかす														2	
	人形の口がらがら, つみきをもっていく												8		2	
	人形の体をタオルでくるむ, ふく													2	18	5
	人形をトラックに乗せる															
	人形の前に鏡をかざす														1	
	人形にオケで (水を) かける													10	2	
	人形におしっこをさせる															
人形にタオルをふとんのようにしてかける																
全 総 数			2		16	14	17	16	12	6	21	21	27	63	24	
象徴	トラックを「ブーブー」といって押す											1				
	スポンジを歩かせる															
	オケから手ですくう, オケで (水を) かける													1		6
	哺乳びんを歯みがきチューブにみたてる														2	
	オケの中でタオルを洗う															15
	鏡を見ながら化粧のまね															
	ブラシについた毛をとるかのようなしぐさ															
	スプーンを口にもっていきフーフーする															
	皿の中で「ナットウ」をかきまわす															
	積木を食べるふり「オイシイ」「センベイ」															1
オケに手をつっこみ「ツメターイ」																
全 総 数												1	5	10	14	40

S (9, 10), K (10, 11) は実験時間 8 分間のもの

いる行動がある。これは人一行為一物の三項の象徴性の獲得の前段階と考えられる。

その後人形の口にガラガラを食べ物に見たててさし出す (S 21, M 19), 人形の体をタオルでくるむ・ふく (S 23, K 20, M 21), 人形におけから水をかけるふり (S 23, K 24, M 21) 等道具にも象徴的意味付けをして人形と共に扱う行動がみられる。即ち人一行為一物の三項が象徴されている。この種の行動は S, K, M には観察されたが Y にはなかった。

d. 象徴的行動

初出は S 20 ヶ月, K 18 ヶ月, M 17 ヶ月, Y 20 ヶ月で頻度は少ないが 24~25 ヶ月頃増加する。最初の行動はトラックを押しながら「ブーブー」と言う (S 20, K 18, M 17, Y 20) で、発声「ブーブー」が伴うことで象徴的と判断される。この発声は実際のトラックの音の模写 (オノマトペ) であり、言語による象徴より低次である。また能記一所記関係についてみると、実際のトラックの音と象徴的音声の間及び実際のトラックの形状と玩具の形状の間のいずれにも類似性が強く、能記一所記の象徴関係のレベルは低いと考えられる。

次に、オケの水をすくうふり, かけるふり (S 23・25, K 24・25, M 22~24), タオルを洗うふり (S 25, K 20, M 21), スプーンの中に熱い物が入っているようにフーフーと吹く (K 25) 等現存しないものをあたかも存在するかのように想定する行動がみられる。また人形にタオルをふとんのようにかける (K 25), 哺乳ビンを歯みがきのチューブに見たてる (S 23) 等の対象物を別の物にみたてた行動もある。さらに皿の中をかきまぜて「ナットウ」と言う (K 25, M 23), 積木を食べるふりをして「オイシイ」「オセンベイ」と言う (S 25, M 23) 等は言語表現を伴うことで見たてが成立しているもので、24 ヶ月前後に出現している。

以上のように物一行為あるいは人一行為一物による象徴的行動が多様に展開されていく。

e. まとめ

操作行動は非用途→機能・用途→人形有意味→象徴の順に発達するが、その発達過程の様相を段階を追って次のようにまとめることができよう。

①既得の行動シエマが対象よりも優先し、行動シエマを対象にかかわらず適用する段階がまずある。これが対象全体をおおまかに探索する役目を果しており、後の物の性質をより積極的に知ろうとする行動への前段階と考えられる。

②次に既得の行動シエマの範囲内であれば対象の性質や機能に合わせてシエマを選択し適用することができ

る。このように物に能動的に働きかけるなかで次第に物に合わせて行動を調節することができるようになっていく。

③物の性質や機能に合わせて自己にとって新しい行動を適用することもできるようになる。このなかから各々の物の一定の慣用的な使われ方を獲得していく。即ち物を見たときに、かつてそれを実際に操作した時、あるいは人が操作するのを見た時の一種の延滞模倣によってその物に対する用い方が喚起され適用される。言い換えれば物が存在すればそれに対する行為が象徴されるのであり、ここに象徴行動の萌芽を見ることができる。

この際、物自体の性質や自己の活動経験の延滞模倣によってもたらされると考えられる行動の出現は比較的早い。人の観察や模倣を通じて獲得させると考えられる行動の出現はそれより遅いと思われる。

④人を介した行動の獲得に伴って他者もまた自己と同様主体たりうるということが認識されてくるに従い、人と行為の二項の象徴がなされ、象徴的行動が出現し活発になっていく。象徴的行動の発達には次のような順序性が考えられる。④象徴性のレベルは、行為の象徴 (一項), 主体一行為あるいは行為一客体の象徴 (二項), 主体一行為一客体の象徴 (三項) の順で発達する。⑤人間の象徴は物の象徴より早い時期に出現する。⑥象徴するものとされるものの類似性が大きい場合は出現が早く、類似性が小さい場合はそれより遅い。⑦身振り・動作による象徴がまず出現し言語表現を伴う象徴は遅れて出現する。

次に言語発達と操作行動の発達の関連をみてみよう。有意味語出現前は非用途の行動及び既得の行動シエマを用いた用途的行動が中心である。一語文の出現期あるいはその直前に本格的な用途的行動と初期の人形有意味行動が始まっている。そして一語文が定着するまでの比較的長い時期に人形操作と物を用途的に関係づける行動が出現している。二文節文の出現の頃または直前に象徴的行動及び三項の象徴による人形有意味行動が出現する。二文節文のなかった Y にはこれらの行動はあらわれていない。文節文が増加し三文節文も表現される頃になって言語を伴う象徴行動が行われている。以上から一項の象徴性は一語文に先行し、二項の象徴性は二文節文に、三項の象徴性は三文節文に先行すると考えられる。

最後に個人差についてふれる。Y は機能的・用途的行動において、物の性質に存した用い方は他児と変わらないが、人を介して獲得されるような用途的行動は頻度が少なく出現も遅れる。人形有意味行動は出現時期が他児より遅く行動のレベルも低い。象徴行動はほとんど出現していない。これらから Y は人とのかかわりの中

で獲得される機能や象徴の点で他児より遅く、このことが言語が一語文段階に止まっていることと関係すると思われる。また M は観察終了の頃には実験者とのやりとり遊びに興味に移り、象徴行動はむしろ減少して新しい遊びへと発展しようとした様子がうかがえた。

E. 遊びの発達

1. 分析方法

自由遊び課題場面における行動観察記録(5秒1単位)を資料に、対物的遊びを中心に分析する。同じ対象物を用いている連続した諸行動、あるいは対象物を用いない場合は一連のまとまった行動と判断される諸行動を遊びの1単位とする。遊び行動のなかから次の項目に当てはまるものをとり出した。

a. 固執行動

①繰り返し行動。同じ物またはさまざまな物に同一の行動を何度も反復する。

②連続把持行動。長時間同じ物を手に持ったままである。

これらは子どもが環境に対し適応的に自己を変化させることができず、固定的な行動パターンが優先してしまう感覚運動的な傾向の一つの表われと考える。

b. 事物の認識及び理解に関する行動

①探索行動。対象物にさまざまな方法を働きかける、あるいは通常とは異なる用い方を工夫して働きかける等の行為を通じて、物の変化や性質を観察する。

②因果関係の理解。物と物の因果的関係を理解していると見なされる行動。

これらは子どもが積極的に環境に働きかけて、環境と自己の行動の関係、物と物の関係を知ろうとする傾向の表われと考える。

c. イメージ・象徴行動

予想をたてる、現在の状況をイメージによって発展させる等の行動。子どもの活動が現実のみに止まらず表象の世界にも拡大していることの表われと考える。

2. 分析結果

a. 固執行動

①繰り返し行動。M を除いた3児に見られる (S 9~14, K 10~13, Y 12~18)。ガラガラや積木をなめる。2つの物をたたき合わせる、物を投げる、は3児とも共通に見られる。またトラックへの物の出し入れ、トムボーイの伸縮等、物の性質に即してはいるが感覚運動的色彩の濃い行動についても繰り返すことが多かった。Y は特に繰り返しの回数が多く、12ヶ月では積木を次々に床に投げつけ積木がなくなると空をつかんで投げる動作を

続けることが観察された。

②連続把持行動。M を除く3児に見られた (S 9~16, K 10~16, Y 14~18)。Y はとりわけ、把持時間が長いと他の遊びが片手のみで行われたり、もう一方の手の中の無関連な物とたたき合わせるという行動がしばしばあった。一方、S, K にはそのような無関連同時行為は少なかった。また Y は別の遊びのために一度手から放すとすぐに探し出してつかむというように把持への固執が強かった。これは一つには Y の不安の強さを示すものであるが、S, K も不安な時には把持が長くなる傾向があり、連続把持行動が発達の傾向を反映するのみならず不安傾向とも関係があるのではないかと思われる。S, K は16ヶ月、Y は18ヶ月以降連続把持行動は減少しやがて消失する。

b. 事物の認識及び理解に関する行動

①探索行動。4児とも出現後一定期間は毎月見られるがその後ほとんど消失する。この繁頻に見られる期間は S が14~18ヶ月、K が17~21ヶ月、M が17~21ヶ月、Y が16~18ヶ月である。S, K は固執行動が減少する頃に出現しているが、Y は固執行動が減少しないまま探索行動が行われている。ガラガラをゆっくりまわして中の玉の動きを観察する、トムボーイの伸ばし方を変えてみて動きを観察する等は4児とも共通にみられた。

②因果関係の理解。本実験場面では出現する状況が限られていたので、電話のベルをならすにはネジを巻かなければならないことを理解している場面、及びクマの人形の手足を動かすためひもを引く場面について検討した。理解ができていると判断できる行動を示したのは電話については K 23ヶ月、M 21ヶ月で、クマについては K 21ヶ月、M 24ヶ月、Y 20ヶ月であった。なお S は因果関係について該当する行動がなかった。

c. イメージ・象徴行動

イメージ行動の萌芽ともいべき比較的単純な行動(犬を見て本の中の犬の絵のページを探す、イナイイナイバー等)は S, K, M において早く出現する。しかし本格的なイメージ行動の出現は S 20ヶ月、K 20ヶ月、M 18ヶ月である。Y は実験終了月までこの種の行動がなかった。イメージ・象徴行動は次のような5つのカテゴリーに分けられた。なお操作行動の項で分析したタイプの象徴行動も観察されているが、ここでは分析対象から外した。

①現在の経験をおもに動作や身振りによって発展させたもの。動物の絵を見てそれが歩くしぐさ (K 22, 24)、自動車の絵を見てハンドル操作の身振り (K 25)。

⑥現在の経験をおもに言語によって発展させたもの、ビールの絵をみて「パパノ」(M 21), キリンを見て「コワクナイ」(M 22), 犬を抱いて「カワイー」(S 23)。

⑦行動の前にあらかじめ予想を立てるもの。動作での予想の観察は難しかったので言語による予想に限りとり出した。トラックの上の人形を見て「メコチャン」と言いながら人形を放り出し代りに自分がのる (M 20), 「ニャーニャイル」と言ってから本のページをめくる (K 23), 積木を別の積木にかざして「タツ?」(M 24)。

⑧実験者とのやりとりの中でイメージを発展させるもの。実験者が「ドアしめてね」と言うと「サムイサムイ」(M 23), 自動車の絵を書いて実験者が「誰がのってるの」と言うと「オカーチャン」(S 25)

⑨実験者とのやりとりの中で実験者の反応を予想しつつきき出そうとしてふざけるもの。実験者が行うことに対し笑って「イヤ」と言うが物を渡して実験者が再び行うのを待つ (K 20), キリン人形を見て「コワイ」と言って笑い実験者が別の動物を出すのを待つ (M 22)。

このように言語あるいは動作によって、また物を介したり人を介したりしながらイメージを発展させているが各カテゴリーの間には特に発達の傾向はみられていない。イメージ・象徴行動は S, K, M においては探索行動が活発な時期を過ぎた頃本格化し、さまざまな場面で遊びを発展させているといえよう。

遊び行動の変化は以上のように、固執行動→探索行動→イメージ・象徴行動、因果関係の理解と時期的には大まかに3段階に分けることができよう。感覚運動的な段階では固定的な行動シエマが対象にかかわらず発現し、外界が自己から十分客観化されていない状態にある。しかし次第に同じ対象でも様々な働きかけによって異なる変化をすることを知り、物の性質の認識が促進される。外界が自己から客観化して見られる。自己と物、物とそれに対する行為の分化、客観化は一方で外界の物と物の関係を客観化して認識することへ、もう一方では表象の世界での自己—物、物—行為の分化へと発展していくと考えられる。

次に言語発達との関連をみる。S, K, Y は有意味発話出現前は固執行動が多い。固執行動の消失の頃一語文が出現している。また S, K, M では本格的なイメージ行動の出現直後に文節文が初出し、イメージ行動の無い Y には文節文がない。これらから固執行動からの脱皮と一語文の出現、イメージ行動と文節文の出現に何らかの関係が推測される。一方 S, K, M の探索行動は一語文のゆるやかな増加の頃行われるが Y の探索行動の時期にはまだ一語文はない。因果関係の理解についても K, M は

文節文出現の頃理解が成功するが Y の成功はそれ以前である。つまり事物そのものの認識に関しては4児共通の言語発達との対応関係が無く、むしろ生活年令との対応の方が大きいのではないと思われる。Y が他児より言語発達が遅いにもかかわらず探索、因果関係理解では決して遅くないことを考えると、Y の遅れが物の認知活動ではなく他の側面（たとえば社会性、パーソナリティ）の要因に影響されているのではないかと推察される。

F. 対人行動

1. 分析方法

自由遊び課題場面の行動観察記録（5秒単位）を資料に、対人行動を a 伝達的行動、b 共同行為としての対人行動の2つの観点からとり出しその発達過程を検討する。

a. 伝達的対人行動

子どもと実験者が何らかの話題 (topic) を伝達する行動をとり上げ、その行動パターンと伝達機能を分析する。

行動パターンとして①活動の確かめ（対物的活動や動作など、行動としては人に向っていない行動をした後に実験者を見る場合で、明らかな要求伝達であるものを除く）、②提示行動（実験者に物をさし出したり、わたす行動）、③指さし行動（事物、事象を人さし指でさし示す行動）、④話しかけ（実験者に発声—無意味発声も含む—によって働きかける行動：実験者の顔を見ての発声と、要求・質問という伝達意図の明らかな発声）を分類して、その量的質的变化を分析する。

その上で、伝達機能を、①働きかけ（②共感を求める陳述、③要求、④質問）、②応答（声に反応して大人を見るだけ、動作・指さし・ことばによる応答）に分類して、伝達機能の分化を見ていく。

これらのカテゴリーの質的变化を分析する上で、行動形態の指標として、伝達行動の際人の顔を見るかどうか、発声を伴うかどうか注目する。

b. 共同行為的対人行動

a の分析では扱えない、実験者の動作に対する反応を中心に、子どもと実験者とのやりとりを共同行為という点から内容分析する。

2. 分析結果

a. 伝達的対人行動

分析対象となった伝達行動の総数を各児月齢別に図3に示す。S・K は増減がありながらも上昇傾向が見られ、M は一貫して多く、Y は全体に伝達行動は少くしかも15~19ヶ月に落ち込みがある。なお、S・K の月齢によ

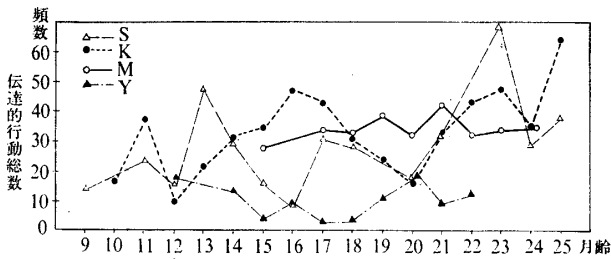


図3 伝達的行動の総数の月齢による変化

の変動は、指さし行動がある時期に集中してあらわれるため、及び、保育園退園 (S 20, K 18, M 19) 以降実験にのみ来園するようになったという状況の変化のためと考えられる。このように、対人行動は実験条件の変化の影響を受けやすいと言える。

①伝達行動パターンごとの発達の変化

③活動の確かめ

活動の確かめは自分の活動に大人の注目をひき、共感を求める行動と考えられる。出現頻数でみると、前半に多く、18ヶ月頃 (S 15 または 20, K 17, M 18, Y 17) にやや減少する傾向がある。

確かめを求める活動の内容は、S・K・M の場合、操作や遊びなど対物的活動の変化に伴って高度になる。つまり、初期には既得の単純な行動 (物にさわったり、たたいたり) の確かめであるのが、12ヶ月頃から、クレヨンでかいて、(K 12, S 15, M 21)、積木をうまくつんで (S 17, M 19) 実験者を見るなど、その時点の行動レパートリーの中で高度な活動の確かめが中心となっていく。特に K は 22ヶ月に確かめが増加しているが、それは絵のすいかを食べて種をすてるふり (25) など象徴的な身ぶりの確かめを求めているためである。一方、Y の場合、確かめは量的にも少なく、ただ物をなめたり、もったりして実験者を見るという意図不明なものが多い。また、ベル押しという単純な行為の確かめは月をかえてくりかえし見られるが、レベルの高い行動後の確かめはほとんどない。S・K・M において、活動の確かめは、自己の活動を大人に伝えて共感してもらう機能、そして大人に共感してもらうことにより自己の活動を確実なものにしていく機能を担っていると考えられるが、Y の対人行動にはこのような機能が不十分である。

④提示行動

提示行動は1才前から出現し (S 9, K 11, M 15, Y 12)、実験中頻度は少ない (1~15回) が、ほぼ毎回見られる。頻数では発達の変化・個人差はないが、行動形態や機能の点では違いがある。

初期の提示 (S 9, K 11, Y 12) はさし出すのみで渡

さないことが多いが、S: 12ヶ月, K: 13ヶ月, Y: 18ヶ月からは相手に渡してしまえるようになる。また、S・K・M の3児では、各々、12, 14, 15ヶ月から提示して相手を見るという、動作によって共感を求める陳述的提示が出現する。そして更に、さし出した物についての発言を伴って共感を求める提示になっていく (S 21, M 20)。例えば、パンダ人形を繰り返し提示して「パ、パ」と言うなど。

16~17ヶ月頃 (S 16, K 16, M 17, Y 17)、開いて欲しくてクレヨン箱を渡すなどの要求伝達提示が出現する。それが言語発声を伴うようになり (S 25, K 21, M 17)、要求の目的をことばで限定していく。例えば、「シュッポ」、(S 25)、「パー」(パワーシャベル)、(K 21)、「オチャカナ」(M 24) と言いクレヨンを渡し、かいて欲しいものを限定することが見られた。

Y の提示行動は箱を開けてもらおうとさし出すという要求的なものに限られており、しかも人の顔を見ないで提示することが特徴である。

⑤指さし行動

指さし行動は1才前後に初出し、(S 13, K 10, M 15, Y 12)、頻数も多い。指さしの量的変化について図4に示す。指さしは S・K に多く、M・Y に少ない。特に Y は18ヶ月まではほとんど見られない。

質的变化について見ていくと、初期 (K 10, M 15~17, Y) の指さしは人を見ることを伴わず自己確認的であるが、後には (S 13, K 12, M 18以降)、指さし後実験者を見る、または発声するという共感を求める陳述的指さしになっていく (Y にはほとんどない)。その後少数語「ワンワン」「ブーブー」を指さしを支えに集中的に使う時期 (S 18, M 18, K は少) があり、更に多数語での命名に伴う指さしになっていく (S 23, K 21~24)。

伝達機能としては上記の陳述的指さしに加え、要求の指さしがあらわれる (S 13, K 11, M 18, Y 19)。また、実験者のことばへの応答としての指さしは K に早くから見られるが「~どこ?」という質問に指さして答

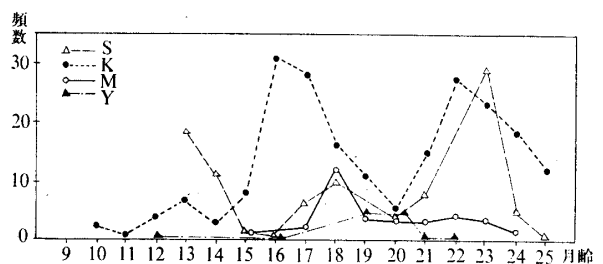


図4 指さし行動出現頻数の月齢による変化

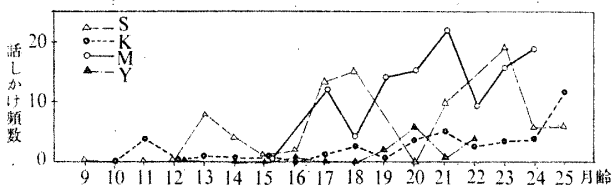


図5 話しかけの総数の月齢による変化

えられるのは S: 23ヶ月, K: 21ヶ月, M: 21ヶ月以後である。またほぼ同時に (S 23, K 17, M 21), 絵を指さしてじっと大人の顔を見て答えてくれるのを待つという質問の指さしが登場する。

指さしは言語的伝達に先行して, 陳述・要求・質問という伝達機能を担う重要な行動であり, また, 既得の指さしを支えにことばによる命名を確かなものにしていく働きもしている。

指さしの機能の点ではこのような共通性が見られるが, 個人差も大きい。S は初出と同時に「アッ」という呼びかけ音を伴った共感を求める指さしが多く, その後も命名の発声を伴う指さしが多く, 伝達機能の分化は遅い。しかし, K は, 15~20ヶ月に自己確認的指さしや, 大人の顔を見て注目をひく指さしにほとんど発声が伴わないが, 伝達機能は早くから分化している。この2児に比べ, M は指さしが少ない。これは M は話しかけによるやりとりが優勢であったためと言えよう。また, Y は頻度も少なく, ほとんど自己確認的な指さしである。

①話しかけ

図5に示すように話しかけは, Y (特に19まで), K (特に17まで) に少なく, S (13以後), M (17以後) に多い。話しかけの内容は, S: 13~18ヶ月, M: 17~18ヶ月は無意味発声を中心で, 一語文出現よりかなり遅れて (S 21, K 20, M 19), 有意味語での話しかけになっていく。Y の話しかけは jargon などの無意味発声にとどまっている。

伝達機能としては指さしに伴う陳述的指さし (S に多い) があり, 続いて要求の指さし (S 16~18, K 17~21, M に多い) があらわれる。それに続き実験者の働きかけに「イヤ」と拒否することが3児に共通して見られた (S 21, K 20, M 19~21)。その後, 「コレナーニ」等のことばでの質問がでてくる (S 24, K 24, M 23)。

指さしと話しかけは, 全体に対人行動が良好であれば, 発声による伝達がスムーズな場合指さしは少なく (M), 話しかけが乏しい場合指さしによる伝達が多い (K) という相補的關係が認められる。しかし, Y のように伝達要求自体が低い場合は, 指さしも発声も少な

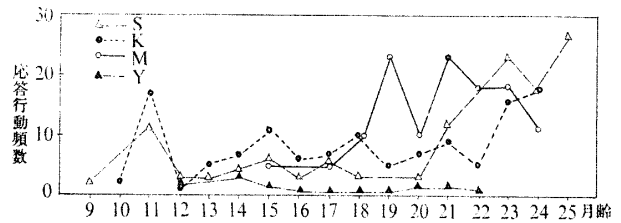


図6 応答行動頻数の月齢による変化

い。

②伝達機能の分化

働きかけの伝達機能 (陳述・要求・質問) については各行動パタンの所で触れたので, ここではまず応答行動の変化を記述し, 次に伝達機能の分化の全体的流れをまとめる。

図6に示すように応答行動は S は20ヶ月まで少なく21ヶ月から急増, K は14ヶ月から他児と比べやや多く, 23ヶ月で急増, M は19で増加しているが, Y は一貫して少ない。

初期の応答は, ことばかけに反応して実験者を見るだけであるが, 動作の応答が少しづつあらわれ, S: 21ヶ月, K: 20ヶ月, M: 19ヶ月に増加する。特に M は動作による応答が多い。K の特徴として24ヶ月から「ちょうちょは」と言われ, とぶふりをするなど身ぶりによる応答が目立った。指さしによって「〜どこ」の質問に答えられるのは, S: 23ヶ月, K, M: 21ヶ月である。ことばによる応答は, それより早く (S 21, K 18, M 19) 増加する。最初は「これ何」に答えられ, 次に (S 23, K 21, M 21), 「誰」に答え自分の名を言うなど応答が多様になり, 更に「何かこうか」といわれ「クマ」と答えるなど現前にはない事柄にも答えられるようになる (S 24, K 25, M 22)。S は, M・K と比べやや応答行動に遅れが見られるが, これは S の言語理解の低さと関連していよう。

伝達機能についてまとめると, まず共感を求める陳述→要求→応答→質問の順に分化してくると言える。また, 個々の伝達機能をどのような行動が担っているかを見ていくと, まず, 何らかの動作をして人を見ることにより伝える段階から→提示→指さし→ことばによって伝えるようになるという流れが見出せる。共感を求める陳述や要求でそれが明らかである。質問は指さしによって始めて伝えられ, ことばによるものになっていく。

言語発達との関連から伝達行動をまとめると, まず喃語期では, 活動の確かめという自己の活動を大人に共感してもらう伝達を中心であり, 一語文出現期前後に提示や指さしによって物を限定する陳述になっていき, 16~

18ヶ月頃、要求が増加するなど、子どもの側からの積極的働きかけが増加する。一語文定着期に言語での働きかけができるようになると共に、相手の話しかけに応答したり拒否することができるようになる。文節文増加期前後に質問も出現し、ことばでのやりとりがスムーズになっていく。

K・Mは上記の経過をたどり、Sは、相手に要求を出すことが少なく、応答ができるのが少し遅れるがほぼ同じ経過を通る。しかしYは一語文出現前から活動のたしかめが少なく、一語文出現後も提示や指さして共感を求める陳述がほとんどなく、話しかけに注目する応答も少ないなど対人行動に問題がある。

b. 共同行為的対人行動

子どもと実験者の共同行為は次のように質的に変化する。初期から、実験者の行動の観察や、自分の活動を相手に確かめてもらうことなど、子どもと実験者のどちらかが受動的役割をとる共同行為がある。

1才過ぎから、実験者に積木をもらってはトムボーイに入れる(S 13)、積木を相手にわたしてはトラックに積んでもらう(K 14)等、実験者と子どもが相補的な役割をとるやりとりの共同行為がはじまる。その後(S 16, K 17, M 15)、その発展として、自分でわざわざ指を汚してはふいてくれるのを待つ(M)等、実験者が自分に何かしてくれるという役割を期待して要求する共同行為になっていく。更に、K: 20ヶ月、M: 21ヶ月からは、相手の反応をより能動的にひき出すふざげ遊びに発展する。例えば、手を口にあてるふりをして、「バッチイ」と言って笑う(K 22)、キリンを見ると「コワイ」と言って笑うなど、わざと否定的発言をして大人の反応をひき出していく。

他方、実験者と同一行為をするという形の共同行為は動作模倣として初期からあるが、物の扱い方の模倣というより実験者と同じことをすることが目的となるような模倣は遅れて(S 14, K 15, M 18, Y 20)、身ぶりの模倣(M 18, K 21, S 23)やクレヨンで実験者と同じ所にかく(S 15, K 16, Y 21)という形であられる。この形の共同行為の延長として、Mの場合、21ヶ月以降「オネエチャンモ」と言って自分から積極的に自分と同一の行為を相手にも要求するようになる。S, K, Yには同一行為を要求することはほとんどなかったが、Kは自分からはじめた身ぶりを実験者がまねするのをじっと見て一緒にする(25)、Sは、自分でかいたクレヨンを実験者に渡してかいてもらおうとする(25)などがわずかに見られた。

言語発達との関連では、喃語期から大人の行動の観察

があるが、一語文出現期になって、やりとりの共同行為、同一行動の共同行為が続いてあらわれ、その後自分から積極的に相手に行為を要求するようになり、一語文定着期にはふざげや同一行為の要求などより能動的に共同行為を求めるようになる。

この過程をK・Mはスムーズにたどるが、Sは能動的に共同行為を求めることが少ない。Yは、全般的に共同行為が少なく、また15~19ヶ月は実験者からの働きかけを顔をそむけることで拒否することが多かった。その後20, 21ヶ月からようやく、同一行動の共同行為があらわれるが、まだそれ以上の発展はない。

G. 総括

1. 言語発達段階における諸行動の発達の様相

言語発達の様相並びに諸行動の発達の様相には、4児に個人差が大きいものの、以上みてきたように共通性がかなりある。そこで言語行動と他の諸行動との発達の関連性を考察する上での手がかりとして、言語発達の段階に合わせて各被験児の月齢時期を区切り、各行動ごとに共通性のみられた点をとりだす。(表4参照)

a. 第I期: 喃語期 (S: 9-13, K: 10-11, M: 15, Y: 12-18)

有意味発話のまだみられない時期である。理解課題で行なったような二文節文の理解はまだ不可能である。

発声模倣はまだほとんどみられないが、動作模倣はすでに出現している。しかしながら、既得の感覚運動的な行動にかぎってのみ可能である。

対事物操作は循環反応的であり、既得のシエマを対象物にかかわりなく適用している行動が多い。しかしその中で、対象物の機能的用途の使用行動が出現しはじめる。すなわち既得の行動シエマの範囲内であれば対象物の性質や機能に合わせてシエマを選択的に適用することができる。

対人行動では全般に受動的ではあるが、自己活動の確かめ、相手の行動の観察、相手の話しかけに対する注目などがみられる。

この時期の終わりごろに、新しい行動の動作模倣が可能になる。また初期の人形有意味行動が始まっている。

b. 第II期: 一語文出現期 (S: 14-20, K: 12-20, M: 17-19, Y: 19-22)

一語文が出現したものの、種類、頻数ともあまり増加せず、無意味発声の優位な時期である。言語指示の理解には個人差があり、K, Mで可能になりはじめる。

動作模倣はすでに新しい行動を獲得していくようなものになっているが、発声模倣はようやく始まったところ

表4 言語発達段階における諸行動の発達の様相

	第I期: 喃語期	第II期: 一語文出現期	第III期: 一語文定着及び 文節文出現期	第IV期: 文節文増加期
各被験児の月齢	S: 9-13 M: 15	S: 14-20 M: 17-19	S: 21-25 M: 20-21	K: 24-25 M: 22-24
二文節文の理解	不可	でき始める 不可	ほとんど可能	完成
模倣	作既得の感覚運動的行動の模倣	共同行為を含む行動の模倣	見たてて行動の模倣	模倣
発声	ほとんどなし	新しい行動のための模倣	増加(種類, 頻数) 多言語, 文節文の模倣(機能 的自動的な反復)	擬似二文節文, 二文節文の模倣
非用途	多数 感覚運動的な行為	能動的な探索的行為	減少	
操作用・機能	ごく身近な物の用途的機能的使用 (既得の行動の適応, 自己活動の 延滞模倣)	ほとんど用途機能に応じて使用 (他者の活動の延滞模倣)		完成
人形有意味	後半 出現 なし	増加(主に頻数) 人形中心	増加(主に種類) 人形に他の対象物を用途 的に関係つける	人形に他の対象物を象徴的に関係 つける
象徴	なし	後半出現(擬音, 行為 の見たて)	やや増加(物の見たて)	増加(種類・頻数) 言語表現を伴う象徴的行動
遊	繰り返しの固執行動 探索行動 Y	繰り返しの固執行動の消失 探索行動 S, K, M. 因果関係理解 Y.	因果関係理解 K, M.	象徴的行動
対人	活動のたしかめ S, K, M. 自己確認的指さし出現 相手の話しかけに注目	提示や指さしによる 積極的働きかけ 共感を求める陳述 → 要求 (なし Y) 観察した行動の受け やりとりを要求 いれやりとり, 同一 → (少ない S)	動作やことばによる応答増加 意味語での話しかけ ふざげ同一行為を相手に要求 (なし S)	指さし, ことばによる質問の出現 言語的やりとり

で、種類も頻度も少なく、自発的にすでに発声されている既得語に限定されている。

対事物操作は提示物の大部分を用途に応じて使用したり、人形を使用した簡単な遊びも可能となる。すなわち他者の活動を観察しその延滞模倣であると考えられるようなものを含むようになる。

対人行動では無意味発声や指さし、身振り、提示などによって、相手に自己の行動の陳述的な共感を積極的に求めるようになる。また自己の要求を相手に伝達するようになる。

この時期の終りに人形有意味操作がさかんとなりはじめ、また低次ではあるが、象徴性を示す行動が出現する。

c. 第 III 期: 一語文定着期及び文節文出現期 (S: 21-25, K: 20-23, M: 20-21)

有意味語が急増し、文節文が出現する時期。二文節文の理解がほぼ可能となる。

動作模倣では実験者の見たてた行動を模倣することがみられるようになる。発声模倣は種類、頻数ともに増大し、機械的自動的な反復がこの時期の特徴である。新しい語を獲得していくための模倣と考えられる。

対事物操作では感覚運動的な行動が減少し、用途機能・人形有意味・象徴といったカテゴリーに分類される了解可能な行動が大半を占めるようになる。人形有意味行動は特にこの時期に種類を増し、他の対象物を人形と用途機能に関係づける(二項の象徴性)行動が中心となる。また対象物を象徴的に見たてた行動が出現する。

対人行動では、言語理解がすすんだため、動作やことばによる応答が増加し、また自らも有意味語を使った話しかけをさかんにするようになる。やりとりも II 期よりさらに積極的となり、ふざけることで相手の反応をひきだそうとする、同一行動をするよう要求する、といったことがみられる。

d. 第 IV 期: 文節文増加期 (K: 24-25, M: 22-24)

発声行動の中心は一語文から文節文へと移行する時期である。格関係も多様になり、三文節文もみられるようになる。

発声模倣はこの時期もさかんで、擬似二文節文、二文節文の模倣が出現する。

対象物の用途、機能的操作は完成する。人形有意味行動は、人形に対象物を象徴的に関係づけることで、三項の象徴性を行動上で表現可能となる。また対象物を他の物に見たてたり、現前しない物を想定することがさかんとなる。この時期に言語表現を伴う象徴行動が出現し、象徴性は多様となる。

対人的やりとりも言語を媒介とするものが中心となる。相手に言語的な説明を求める質問が出現し、また自らも様々な事象を説明することがさかんとなる。こういった言語を媒介とした共同行為の中で、自己の象徴機能あるいは言語力を強化させていく。

2. 言語発達段階における諸行動の差異の様相

言語発達をはじめとして、諸行動の発達の過程でも個人差がみられている。そこで、言語発達で明らかにされた差異が、どの行動に基盤をもつものかを検討する。

まず言語発達を中心にみていく。M は一語文の初出がやや遅い (17) が、一語文の定着 (20)、二文節文の出現 (20)、三文節文の出現 (22)、文節文の定着 (24) と変化が速い。S, K はともに一語文の出現は早い、(S 14, K 12) その定着はいずれも 21ヶ月である。二文節文の出現は S: 23ヶ月, K: 22ヶ月であり、三文節文は K: 25ヶ月にみられる。S と K は、一語文の定着までは発達がゆるやかな点で共通であったが、二文節文出現以降差がみられ、S はゆるやかなまま、K は発達の急激な変化が急激となる。他方 Y は一語文の初出が 19ヶ月と遅れ、観察終了時の 22ヶ月までに一語文の定着には至らなかった。

言語発達の様相が非常に類似する月齢時で、一方は翌月齢時には発達段階が次に進み、他方は同じ段階にとどまるという条件のものを選び、両者の認知的社会的諸行動における差異をとりあげ検討する。

まず Y と S を比較する。Y: 20ヶ月と S: 20ヶ月は言語発達の様相が非常に類似している。しかし翌月の 21ヶ月には S は III 期にはいるが、Y は II 期のままである。

20ヶ月における 2 児の諸行動の差異は、対人行動でみられるが、他の行動(操作行動、模倣行動、言語理解)ではおどろくほど類似している。対人行動における差異は以下の点である。自己活動を相手に確認してもらおうとする活動後の視線が S にはあるが Y にはない。Y の視線は意図不明のものがほとんどである。陳述的共感的な提示行動が Y にはない。指さしでは S のは陳述的な機能を担うが Y にはない。また無意味発声による話しかけが Y に少ない。相手の働きかけを拒否し、そっぽを向く行動が Y にのみ見られ、相手のことばかけに注目することも少なく、相手の行動の受け入れも 20ヶ月まではほとんどない。

すなわち相手とのやりとりが少なく、自己活動から脱皮できないでいる状態を Y の場合示しているといえる。

次に S と K とを比較し、二文節文出現あたりで生じ

た発達差を検討する。Sの24ヶ月、Kの23ヶ月、は様相が類似している。翌月の25ヶ月にKはIV期にはいるが、SはIII期のままである。ではどの認知的社会的行動に差異があるのだろうか。言語理解で大きな差異がある。Kはこの月・時 $12/14$ 可能だが、Sは $1/14$ である。対人行動で、要求をはっきり言語によって限定していく、要求の回数で、ややちががみられるものの、他の行動では、いずれもよく類似している。したがって発語面で言語構造を発達させていくには、言語構造をもつ文の理解が前提と言えよう。

IV. 考 察

これまでの結果から、初期言語発達と諸行動の関係が明らかにされた。しかし本研究から知りうることはあくまでも互いに時期的に近接しているかどうかという意味での関係である。ここから直ちに両者に因果的あるいは発生的関係があると結論づけることは早急であろう。しかしながらこれらの関係が単に偶然的な一致では決してなく、子どもの知的、社会的発達の上で互いに密接なつながりをもつものであろうことは推測に難くない。そこで本研究の結果をふまえて両者の発達の関係について推論を試みる。

目的の項で言語の特質として3つのことがらを挙げた。すなわち、象徴性、統語構造をもつこと、コミュニケーションの手段、である。これらの特質が獲得されていく過程で諸認知行動とどのようなかかわりをもつであろうか。

言語の発生に先立ってまず感覚運動的自己充足性をもつ行動からの脱皮が必要であろう。外界の事象を積極的に探索、模倣して自己にとりいれつつ、それらの物の用いられ方に即して自己の行動を調節できること、また人に積極的に働きかけて反応を見、それに自分を合わせていくこと、これらが象徴性という言語の性質、あるいはコミュニケーションの手段としての役割を獲得するための一つの前提条件と考えられる。言語を習得するためには他人の発声を自己にとり入れ、他人の発声に類似した語音を調節して作りださなければならないからである。このように外界との同化、調節作用がまず行動面で可能になり、やや遅れて音声面でも可能になると考えることができよう。

物に対する命名は言語の象徴機能の最も基本的なあらわれである。一語文の初出後、命名が活発で、物—ラベル関係の確認や強化に力が注がれることを我々は見た。しかし、命名という音声による象徴の出現の直前には、

非言語的行動の中ですでに象徴があらわれている。物の用途的操作や延滞模倣は、物が現存する時に行為を象徴することを示している。物—行為の二項は象徴できないが、一項すなわち行為のみを象徴できることに他ならない。一語文出現期の命名行動は現存物、現状に対しての発声であり、象徴されるもの(所記)が、物か状態か行為かにはっきり分化されてはいない。つまり一項の象徴性といえる。このように象徴性が行動面で現われ、言語面での出現を促進するものとして作用すると考えることができよう。また、探索、模倣による事物へのかかわりの多様化は、語いの増加と一語文機能の多様化(命名、要求)に何らかの役割を果しているのではないかと思われる。

構文の獲得によって言語表現の範囲は拡大する。既知の語いを組合せることで事象をより豊かに表現できることを発見する。

統語構造の出現の時期に注目されるのは、象徴遊びの出現、人形有意味行動やイメージ行動の活発化である。これらは2項の象徴性をになうという共通性がある。もはや現前の世界にしばられない。行動における二項の象徴性と文節文における二項の象徴性は同じ認知的基盤をもつものであろうか。行動における象徴性が若干早く出現し、言語の象徴性がそれに続く。これらの二項分化の認知的基盤は象徴化の行われる以前の現実の行動場面の中に既にあるのではないか。それは一方では物に対する様々な探索行動にみられるような、物とのかかわり方の発達の中であり、他の一つは、物を介した人とのやりとり及び直接的な人とのやりとりや共同行為を通じて得られる自己—他者関係の認識である。

次にコミュニケーションの手段としての言語の機能について考えてみよう。

本研究の結果は、以下のことを示す。喃語期では対人的かかわり方が受動的であり、また言語の命名機能が中心の時期においても、まだコミュニケーション機能は十分になわれていない。しかし、他方この時期に発声模倣や指さしに伴う発声を通じて人との経験の共有・確かめ合いが行われ、音声が人との関係づけの媒介の機能を果し始めている。

このような別々の機能が統合し、またコミュニケーションの手段として言語が機能し始めるのは一語文定着及び文節文出現の時期である。語いの増大、構文による表現内容の拡大、自己—他者関係の認識の発達が行動による働きかけ、応答の限界をつきぬけ言語による働きかけ、応答を可能にする。獲得される語の増加がコミュニケーション機能を促進し、人とのやりとりによって新たな言語を獲得するという相乗作用が働き、言語発達は—

層促進される。

最後に個人差の検討から導びかれたことがらについて若干の考察を加える。Y と S の比較から、一語文を定着させていく基盤の一つとして、対人行動への志向性をあげることができよう。相手の話しかけに注目する、相手の行動を観察する、自己活動の確かめを求めて相手を見る、さらには積極的に自己活動の陳述の共感を提示や指さしにより求めていくことなどの重要性を指摘できよう。対人行動への志向性は S のみならずもちろん K、M にも観察の早期からみられており、Y との決定的な開きのあった点である。

また文構造を獲得するための基盤の一つとして、二文節文などの文の理解があげられよう。あたりまえのことであろうが、二文節文の理解なくして二文節文を生産することはできないのである。

最後に個人間の比較から、個人間で同一の言語発達を示している時点で、操作行動に代表されるような象徴性の発達がおどろくほど類似していることに気づく。言語発達と象徴性の発達とは深い関係があり、あるいは同じ基盤に立つものと言えるかもしれない。

しかしながら、本研究だけから結論を出すことはできない。今後、対象児数を増やすことにより、あるいは臨床的、実験的に確証していく必要がある。

引用文献

- 1) Piaget, J., 1945, *La formation du symbole chez l'enfant*, Neuchatel: Delachaux et Niestle.
- 2) Inhelder, B. et al., 1974, "Les débuts de la fonction symbolique," *Archiv de Psychologie*, pp. 187-243.
- 3) Low, M., 1975, "Trends in the development of representational play in infants from one to three years—an observational study," *J. Child Psychol.*, Vol. 16, pp. 33-48.
- 4) Tizard, B. et al., 1976, "Play in pre-school centers I, Play measure and their relation to age, sex and I. Q.," *J. Child Psychol. Psychiat.*, Vol. 17.
- 5) McNeill, D., 1970, *The acquisition of language. The study of developmental psycholinguistics*, New York, Harper and Row.
- 6) Bruner, J. S., 1977, "Early social interaction and language acquisition," H. R. Schaffer (ed.), *Studies in mother-infant interaction*, Academic Press.
- 7) 吉田泰子 1976, 「二語発話の発達」村井潤一他共編『ことばの発達とその障害』